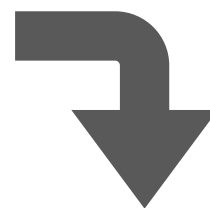
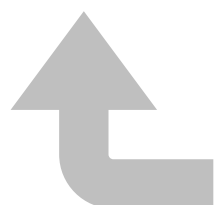


タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」



第5回：第1章-その5-

「人の命，人生，生きる意味」の探究の麓



著：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

なぜ，その本を手にとったのか？

対人援助学会 2020 年次大会における企画ワークショップ，「対人援助実践をレポートするこの 1 冊」においてご登壇頂いた小幡知史先生，二階堂哲先生の両名は，言わずもがな，対人援助実践に大変に熱心なお方です。お二人は，それぞれの領域で目にする当面の問題や課題に一生懸命取り組まれながらも，それに振り回されすぎないようにご努力されています。表現が不適切かもしれませんが，目の前の事象云々といった「些末なこと」より，簡単には抱えきれないその援助対象者の人生そのものを捉えようとされ，そして，その答えを見出すのに苦悩しながら，真摯に探究を続ける方であることを，私は知っております。

さて，そんなお二人が，前回，前々回の本誌でご紹介して下さった文献は，「行動分析学」と「仏教」に慣れ親しむ本でした。不思議なものです。この世には数えきれないほどの文献が存在しているのに，結局私たちは似たような本を手にとり，その本から何かを感じ，学ぼうとしていたのですから。

事実，お二人が私にそれらの本を紹介して下さる前に，私は誰にも勧められることなく，前々回に小幡先生がご紹介された「行動分析家の倫理～責任ある実践へのガイドライン～」を，前回に二階堂先生がご紹介された「はじめての応用行動分析」と「自由への旅マインドフルネス瞑想 実践講義」を購入して，読了していたのです。ですので，今般のワークショップの企画が立ち上がり，お二人が「こういった本を取り上げたい」とおっしゃった時，私は開口一番，「ああ，この本ね。いいよねえ」と自然とつぶやいたのでした。

もちろん，他者がこのエピソードを耳にされれば，「あなたたち 3 人の学歴だか教育履歴，つまり，学術的バックグラウンドは同じだろうから，そういった現象を起しやすはず。よって，不思議というほどのことではない」と，ご一笑されるかもしれません。しかし実際，小幡先生は心理学部ご出身，二階堂先生は教育学部ご出身，そして私，渡辺は，社会学部社会福祉学科出身ですので，同じような教育を受けてきたわけではないとい

えるのではないのでしょうか。

ただ、私たち3人は、それぞれが異なる対人援助の臨床に携わりながら、その職場だけでの学びと実践では到底、納得、満足、安心ができなくて、他に答えを求めて彷徨うようになった点において、完全に一致しております。そしてその過程で結果的に、似たような学問や領域に興味関心をもったのかもしれませんが。

こうやって改めて企画ワークショップの内容に至る経緯を描写すると、類似性の法則よろしく、似た者同士がたまたま、そして自然と接近しあって、似たような興味から、隣接性の高い文献を選んでしまったのかもしれませんが。私自身が一笑してしまいます。

そういえば、今や世界的なコミックとして世代を超えて親しまれている集英社の「ジョジョの奇妙な冒険」の第4部で、「スタンド使いはスタンド使いにひかれ合う！」という有名なセリフが登場します。このセリフは、同じような能力をもった者同士がなぜか自然とかかわりあいをもってしまうという現象は至極当然であると述べています。



荒木飛呂彦の「ジョジョの奇妙な冒険」(集英社) から

「ジョジョの奇妙な冒険」に登場するスタンドのような能力は私たち3人にありませんが、「対人援助をなんとかしたい」と考える能力と、その発動が、私たち3人を引き合わせたのかもしれませんが。冗談だか本気だかよくわからないお話ですが、そういえば私たち3人は30-40代でして、まさに「ジョジョの奇妙な冒険」の「ど真ん中」世代にあたりますし、ふと思い出しますと私、渡辺は、週刊少年ジャンプにおける「ジョジョの奇妙な冒険」の第1話をタイムリーに読んでいました。あれから30年以上たっていることにびっくりですが、不思議な、そして、奇妙な「縁」さえ感じるところです。



佐々木閑, 大栗博司 (2016),

「真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話」幻冬舎

「縁」, といえば, 今般の企画ワークショップで渡辺が紹介させていただいた本もまた, まさにその「縁」のあらわれかと思いました。私が手にとって本は, 次の2冊でした。

1冊が, 仏教学者である佐々木閑先生と, 物理学者である大栗博司先生の対談をまとめるように構成された「真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話」であり, もう1冊が, 同じく佐々木閑先生の名著, 「犀の角たち」を加筆修正の上, 文庫化した「科学するブッダ 犀の角たち」でした。奇しくも, すなわち「奇妙」にも, これらのセレクションは, 小幡先生が志向された援助の「科学性」と, 二階堂先生が志向された援助と「仏教哲学の親和性」に應えるものとなっていたのです。

「奇妙な縁」だか, ゆるぎない何かによって, 私たち3人は偶然とも必然とも言い表せないつながりにより, しかるべき勉強に着手していたのかもしれない。読者の皆様は, これまたご一笑されるのでしょうか?

援助実践で生まれた疑問と「科学と仏教哲学」

さて, まず, 「真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話」がどのような文献なのかについてご紹介させていただきます。

この本では, まさに各界を代表する研究者である二人の著者が, それぞれの基盤に基づいて「真理」を探求しています。すなわち, 仏教学者である佐々木閑先生と物理学者である大栗博司先生が, 宗教と科学の両側面から, 私たちが現存するこの宇宙において働いている真理を捉えようとしているのです。

未熟な私では, 気鋭の研究者である著者たちの意気込みを端的に, そして的確に説明することができません。そのような私の非力さをお詫びするとともに, 以下, 稚拙な私の理解で述べることをお許しください。

私は, 著者たちがこの本で訴えたいことを, 「自然法則と人間性を同時に, あるいは同一にとらえること」であると理解しました。それは「人間とは何か」, あるいは「人の命」や「生きる意味」に対する問いの答えを導いてくれるような冒険の過程でした。この, 今申しあげた3つの問い, すなわち, 「人間とは何か」, 「人の命とは何か」, そして「生きる意味とは何か」とは, 結局すべて似たような問いであるため, 最終的には1つに

問いに集約されるかもしれません。

実は、この問いこそ、ありとあらゆる対人援助臨床において共通して援助者に課せられる理念的哲学的問題であると、私は考えております。私がこの問題にはじめて直面したのは、22歳の秋でした。

その日、私は、最重度知的障害を有する援助者対象者のS氏（以下、S）と一緒に、Sの衣類の整理を行っていました。Sは私の4つ年下でした。障害がゆえに、Sと言語的な意思疎通はままなりませんし、また、Sはご自身で衣類がたためません。よって、私が衣類整理するのを、ただ、そばでSに見てもらおう、否、ただそばにいてもらう、という援助場面でした。

たまたま便秘気味だったためか、Sは大変に不機嫌な様子でした。私が衣類整理をはじめようとSに声をかけると、眉をひそめて唸り声をあげはじめました。そして私がタンズにトレーナーなどの衣類をいれはじめるとまもなく、いきなり、私の左側面から全力で頭突きをしてきたのでした。

虚を突かれた私のメガネは空を飛び、一瞬にしてフレームはゆがんでしまいました。激しい痛みを襲われつつも私は何が起こったのか理解できず、周囲を見渡すと、ただ、Sは何事もなかったかのように佇んでおり、そして、私とS以外は誰もそばにおらず、先と変わらぬ風景、つまり、衣類だけが私たち二人のそばにあるだけでした。

つまり、ただ、Sが、たまたま私に頭突きをただけでした。ただそれだけです。

きっとSは、たまたまそばに私がいたから、そうしたのでしょう。

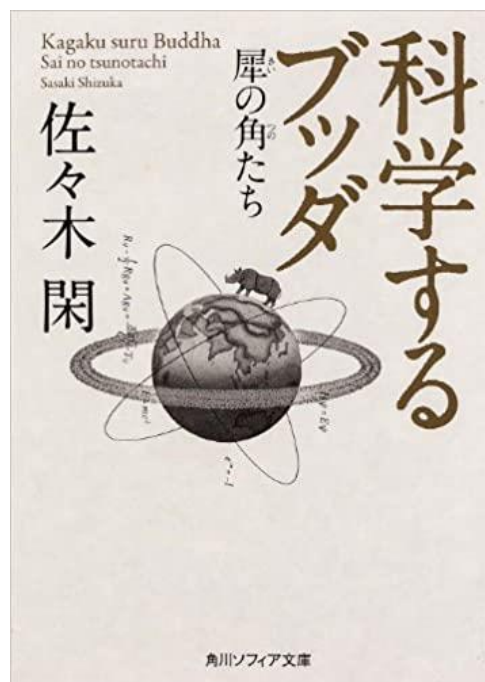
きっとSは、たまたま心身の不良か何かがあったから、そうしたのでしょう。

ただそれだけのことにすぎないのでしょう。

そのような単純な出来事であることをなんとなく理解しつつも、私は、左こめかみ周辺に残る強い痛みと、フレームが歪んでしまったメガネが落ちないようにすることの難しさを感じながら、先に述べた問いと直面しました。

「…人間って何なんだ、人の命ってなんなんだ、生きる意味ってなんなんだ…」

このような問いが生まれてきた理由は、うずくような痛みが、以下に記すいくつかの事実・現実を私に気づかせたからです。一瞬にして一斉に、私の頭の中で飛び回ったのでした。



佐々木閑 (2013),

「科学するブツダ 犀の角たち」, KADOKAWA

- 1) 私が S のために働いているのにもかかわらず、S から攻撃されるという事実
- 2) 本来であれば S をそばにおかないほうが衣類整理しやすいのだが、そのような作業効率の追求は援助の質と合致しないという現実
- 3) S にそばにいてもらいながら衣類整理するという援助は、理想的には間違いではないものの、その援助企図や効果が実は不明瞭であるという現実
- 4) そしておそらく S の障害は、今後一生回復しないであろうという現実
- 5) メガネの破損も私の怪我也、すべて私の責任とされる現実（当時はそれがあつた種の常識だったので）
- 6) 怪我を負い、メガネを破損してしまった私を労う人、励ます人、慰める人は皆無であり、また、このような出来事がある意味忘れなければ、S の援助を気持ちよく展開することが今後難しくなるという現実
- 7) 1) ~ 6) を踏まえた上で、S と自分、それぞれの命、人生、生きる意味の違いを、誰も、そして良くも悪くも、何も説明できないという事実
- 8) そして、そんな私の思いを、おそらくまったく理解していない S が目の前にただ、佇んでいるという事実。頭突きしたことなどまるで覚えていないかのように、普段通りの態度を示しているという事実。まるで、思い悩む私が馬鹿みたい、滑稽に見えてくるという現実。

実にお恥ずかしい告白ですが、私は、援助の難しさ、援助者の辛さを、自分より年下の最重度知的障害者の屈託のない表情を見ながら、発見したのです。かといつても、手を休める暇はなかったので、私はトレーナーをたたみ、T シャツをたたみ、ズボンをたたみ、タンスの中を整理し続けました。誰のための作業なのか、もしかしたら第一義は S のためではなく、実際に衣類を取り扱う援助者や、あるいは、このような援助を肯定する社会のために行っているのかもしれないという疑問をかみしめつつ。あるいは、なんのための作業なのか、もしかしたら援助者の着衣介助の効率性向上のためであったり、「人の衣類の取り扱いとは」という社会が作り出した観念の維持のために行っているのかもしれないという問題意識を吐露しそうになりながら。

その後、こういった問題意識だか疑問を、何かの拍子に職場の先輩に相談したら、「考えすぎ」と大笑いされ、答えを見つけ出せない私に対して「しゃーねーべよ（茨城弁で、しょうがない、仕方がない、という意味）」と結論付けていただきました。

“しゃーねー”

仕方がないこと。今すぐの対応が簡単ではないこと。

確かに、私のような若輩者が簡単に答えを見出せることではないのですが、とはいえ、このような疑問をあたかも「なかったこと」として仕事をするには、それこそ簡単ではありませんでした。命だ、人生だ、生きる意味がなんなのかということは、それは S にのみならず、自分自身にとつても共通する問題であるし、また、このような問題を

回避しながら援助実践を続けることは、結局、なぜ援助するのかという起点なり目的なり真実の理由を失うことになりかねないという思いがあったからです。

このような若かりし頃の私の問題意識は、必ずしも表層化したままではありませんが、私の対人援助実践のどこかに脈々と根付いていきました。そして、佐々木閑先生と大栗博司先生の知的な取り組みは、まさに私のその問題意識とリンクする内容だったのです。つまり、人の命、生きる意味を深く考え、古代から最先端の科学までを幅広く網羅しながら、また、人の立場から現世を生きる喜び（悦び）を見出しながら、人が人を支えること（援助）の尊さへの言及を展開されていたのでした。

さらに、佐々木閑先生の「科学するブッダ 犀の角たち」では、科学と仏教の深淵なるつながりが指摘され、過去 - 現在 - 未来をもつなげる視点や、人間の世界観に留まらない視点、そして、宇宙への探求と人間へのそれが同一であることが述べられております。それはとても未来志向の考察でした。そういった意味で、この本を読了した時、私は何か、希望のような思惟を得れたような気になったのでした。

そんな私の思いを、今般の企画ワークショップで皆様にお分けさせていただきました。私の稚拙な思いがほんの少しでも皆さまに届けば、望外な喜びになります。もっとも、今回の2冊を読むに際し、仏教哲学の基礎知識がある程度ないと、人によっては拒否反応（？）を起こすかもしれません。もしそうなるのであれば、渡辺の独りよがりになってしまったことをお詫び申し上げます。そもそも、私自身がまだまだ勉強不足で学んだことを具現化、実践化できずにもたもたしておりますので、人様に適切に文献を紹介できる立場にはほど遠いのが実情でした。

ただ、また、対人援助実践に行き詰ることがあれば、リブート（reboot、意味は再起動）のスイッチとして、これらの本を再読し、学びと探求を再開したいと思っております。それが今の私の本心なのです。

今回はこの辺で。

それではまた。

- つづく -